

地区版地域福祉活動計画策定における「見える化」ツールの開発

ー多様な主体による参加型評価への活用に向けてー

○ 岩手県立大学 佐藤 哲郎 (7454)

キーワード3つ：計画の見える化、ロジック・モデル、参加型評価への活用

1. 研究目的

地域包括ケアの推進や地域共生社会の具現化を踏まえた場合、公私による地域福祉活動（以下、「活動」）だけではなく、地域住民・行政や専門機関・専門職等（以下、「関係者」）との協働による地区版地域福祉活動計画（以下、「地区版計画」）がより重要になってくる。

しかし、策定義務ではない地区版計画の実効性を考えた場合、次の課題が考えられる。

第1に、計画全体像をどう「見える化」することができるのか。策定した地区版計画を関係者が全体像として共有することが協議や合意形成、実践において重要と考える。

第2に、策定プロセスにおいてどのように多様な関係者が参加するのか。計画が「絵に描いた餅」にならないためにも、関係者が協議を重ねながら合意形成を図っていくことが求められる。

第3に、地区版計画をどのように評価していくのか。いつ（「評価時期」）、誰が（「評価主体」）、どのように（「評価方法」）、という観点を意識することが重要となる。「評価時期」に関して、筆者は地区版計画の策定においては事前評価が重要だと考えている。プログラム評価の5階層（Rossi, Lipsey, and Freeman 2004）に基づけば、それはセオリー評価に位置づけられる。「評価主体」について、地区版計画では多様な関係者が評価活動に参加する、いわゆる参加型評価が有効だと考えている。「評価方法」については、「評価時期」ならびに「評価主体」とも関連してくる。

以上の、3つの課題を踏まえ、地区版計画の策定においてロジック・モデルの作成が有効ではないかと考えた。なぜなら、ロジック・モデルは、①プログラムの計画策定、②プログラムのマネジメント、③コミュニケーションツールとしての活用、④関係者による合意形成、⑤資金の調達のための説明、の目的（Innovation Network, Inc. 2010）に加え、計画全体像の「見える化」が可能となると考えたからである。

そこで、本研究ではロジック・モデルをアレンジし、「見える化」ツールとして活用することで、地区版計画策定に果たす効果について検討することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

研究の視点として、3つの課題で提示した①計画全体像の「見える化」、②策定プロセスでの多様な関係者の参加、③計画の評価、を踏まえ、地区版計画策定においてロジック・モデルを「見える化」ツールとして活用した松本市A地区での取り組みを事例とする。

3. 倫理的配慮

本事例の扱いについては、日本社会福祉学会研究倫理指針に則り、その地域が特定できないよう固有名詞を匿名化している。また、参加した住民および専門職等に対して、本事例の研究での取り扱いに関して口頭で説明し、発言内容等について特に個人が特定されないように留意し、守秘義務について遵守することで承諾を得た。

4. 研究結果

A 地区での地区版計画を策定するに際し、地区住民、行政および公民館職員、地域包括支援センター保健師、社協職員等 16 名が参加し、ワークショップを 2016 年 11 月から 12 月にかけて合計 3 回実施した。そして、地区版計画のセオリー評価としてロジック・モデルを作成した。その結果は以下のとおりである。

(1) 計画全体の「見える化」

まず、A 地区内の社会資源および実施している活動、趣味・特技や専門的資格・技術等を有している住民をリストアップした（【資源】）。次に、地区内における既存の活動を結びつけることや新たな活動を加えることで、①活動そのものが広がったり、内容が充実できそうなこと、②前記①の結果、A 地区の地域福祉の充実や推進につながりそうなこと等のアイデアを出し合い協議した（【活動】）。その結果（前記①・②）として地区が 5～10 年後にどのように変化していくか（【結果】【成果】）を時系列でまとめた。そして、ロジック・モデルを作成することで地区版計画の全体像を関係者で「見える化」することができた。

(2) 多様な主体による参加（協議および合意形成の促進）

3 回のワークショップにおいてロジック・モデルを作成することで、メンバー間での協議が深まり、内容の合意形成を図ることにも役立った。

(3) 計画の評価（セオリー評価ならびにプロセス評価、アウトカム評価に向けて）

ロジック・モデルはセオリー評価において主として活用されるが、A 地区では地区版計画策定後も、関係者がロジック・モデルを定期的に確認しながらプロセス評価を実施している。地区版計画は 5 カ年計画であり、最終年度にはアウトカム評価の実施に向けて体制を整えることも今後は必要となる。

5. 考察

地区版計画策定のプロセスにロジック・モデルを活用することで、以下のことが明らかとなった。①計画全体像の「見える化」が可能となった。②多様な主体が参加し合意形成を図るツールとして機能した。③参加型評価として活用できる可能性が見出された。

課題として、①セオリー評価からアウトカム評価に至る体系的な評価実践へつないでいく、②地域福祉領域での参加型評価へ適用するためのモニタリングの実施等があげられる。

***本研究は、科研費（17K04209）の助成を受けたものである。**